Hamamatsu Museum of Musical Instruments
浜松市楽器博物館だより
No. 100
2015. 4. 13
本紙はホームページでも見ることができます。

楽器博物館 20 周年と小泉文夫音楽賞

平成7年（1995 年）4 月に、日本初の公立楽器博物館としてオープンした浜松市楽器博物館は、去る 4 月 9 日、開館満 20 年を迎えました（落成式は 8 日）。当時、100 年以上の歴史と伝統を持つ楽器産業を背景に「音楽のまち」づくりを推進する浜松市が、日本や世界に誇れる浜松ならではの音楽文化拠点施設として、アクトシティ浜松とともに創設したのが、この楽器博物館でした。

そのコンセプトは、浜松の楽器産業の中心である西洋楽器にとどまらず、「世界の楽器を平等に扱い展示する」という、欧米の楽器博物館にはない世界に誇るべきものです。開館時には、ヨーロッパと日本のみの楽器数百点だった展示楽器も、今では 1300 点ほどとなり、2006 年には展示室のリニューアルも実現し、名実ともに「世界の楽器を平等に展示紹介する博物館」となりました。

展示や活動のモットーは「みる・きく・ふれる」。素晴らしい立体造形物としての楽器、その音や音楽、そして自らも触れてみる、というモットーです。知られざる素晴らしい楽器や、音楽を世界中から集めて紹介することにも努めてきました。貴重な文化遺産である所蔵楽器も、痛めることなく可能な範囲で実際に演奏するということも実行してきました。西洋音楽、非西洋音楽を問わず、質の高い音楽とその文化を発信するために、国内外の多くの方に絶大なご支援をいただきました。

そして、2000 年からは教育普及事業として浜松市内の小学校に職員が出向き、子どもたちに世界の楽器を通してその国の人々の暮らしや文化について語りかける、移動楽器博物館を行ってきました。初期の頃の小学生が今では大人になり、楽器博物館の良き理解者として応援してくれています。「楽器博物館は浜松の誇りですよ」とおっしゃって下さる市民の方もたくさんいらっしゃいます。

また、これまで当館所蔵の楽器を使用した CD を数多く製作してきました。2012 年にはコレクション CD No.38 が文化庁芸術祭レコード部門で最優秀の大賞を受賞し、それがヨーロッパにも伝わって、ヨーロッパでの博物館や美術館が集う国際会議に招待され活動を発表してきました。さらに、民族音楽学の世界的な賞である「小泉文夫音楽賞」の 2014 年度受賞者に選ばれました（授賞式は 5 月）。楽器博物館を 20 年間応援してくださった皆様と共に、この 20 周年への素晴らしいプレゼントを喜びたいと思います。

20 周年の今年、楽器博物館はいくつかの催しを企画しています。主要なものは、自国とアジアに目を向けたレクチャーコンサート「甦る唐代琵琶譜の音楽～古代シルクロード・敦煌から正倉院へ～」（5 月 24 日）、「雅楽と仏教が織りなす壮大な国際音楽～四天王寺聖霊会の舞楽～」（7 月 12 日）。博物館自慢の 19 世紀のピアノ（フォルテピアノ）を演奏するコンサートシリーズ「フォルテピアノとその時代」、ウィーンスタイルの吹奏楽を紹介する「麗しきウィーン」等々。特別展では、浜松の楽器産業と社会貢献のルーツを紹介する「リードオルガンがくれた幸せ」、博物館の 20 年を振り返る「楽器博物館の 20 年」、文化人大倉喜七郎考案の新楽器を紹介する「和魂洋才・オークラウロと大倉喜七郎」を予定しています。どうぞご期待ください。

楽器博物館 20 周年へのメッセージ

オープン時の思い、20 年間健在

この博物館がオープンする 1995 年 4 月までの数年間、私はその準備作業スタッフの一員でした。日本初の公立楽器博物館ということだったので、頭の中でそのための手本としたものは、主として実績のある海外の楽器博物館や楽器以外の国内専門公立博物館であったことを記憶しています。そして、準備段階からもっとも大切にしてきた観点は、様々な制約を乗り越えても「楽器を展示ケースの中に眠る置物」にしないことでした。創設時スタッフのこの思いはその後 20 年の時を経ても、浜松市楽器博物館の顕著な特色の一つとして国内外から評価を得ていることは何よりもうれしく思っています。様々な音楽領域のアーティストと提携した CD の制作や各種の解説付きコンサートなど、音を出す道具あるいは音楽を奏でる道具としての「生きた楽器の姿」を紹介しようとするこうした活動は、これからもこの博物館の特徴であり続けてほしいと願っています。

西岡信雄（大阪音楽大学名誉教授・浜松市楽器博物館名誉館長）

今に生きている博物館

開館 20 周年おめでとうございます！

浜松市楽器博物館の魅力は、「今に生きている博物館」であるということでしょう。楽器の展示だけでなく、楽器を生み出した時代背景や文化などを紹介し、最高のコンディションに調整された楽器で、さまざまな音楽の響きを積極的に発信しているという点で、世界からも熱い注目を浴びています。現代の私たちに様々な時代や国籍の楽器が、何をもたらすのか？そのようなことにも心を砕く刺激的な活動は、本当に貴重なことだと思います。このような素晴らしい博物館と、レクチャーコンサートやコレクションシリーズを通して共に歩ませていただきましたことは光栄です。その中での、コレクションシリーズ CD38「イギリス・ソナタ ～ブロードウッド・ピアノ 新世紀の響き～」が、平成 24 年度文化庁芸術祭レコード部門“大賞”受賞となったことは望外の喜びでした。

今後も「今に生きている博物館」が、躍進を続けることを期待しています。

小倉貴久子（東京藝術大学大学院古楽科非常勤講師・フォルテピアニスト）

生き続ける楽器博物館

「生きた」楽器博物館として 20 年！これは素晴らしいことです。ブランシェを筆頭にチェンバロの名器たちも鎮座する浜松の楽器博物館。どのチェンバロも大切に守られながら、しかも今でもちゃんと演奏できる！ 演奏会やテレビ撮影、CD の収録を通して、私もお手伝いさせて頂き、チェンバロたちに触れる度にその魅力と威力に感動して参りました。しかし、もう20年ですか？ 館長の指令のもと、博物館としての様々な活躍も充実した「アッ」と言う間の 20 年でしたね？ これからも更に「生き続ける」楽器博物館として益々の御発展をお祈り致しております。20 周年本当におめでとうございました！

中野振一郎（チェンバリスト）

楽器に内在する、見えない“コト”を展示する博物館

この世の中は、目に見える“モノ”と見えない“コト”で成り立っている。楽器はモノだが、演奏はコトだ。だが、楽器をつくり上げているのはモノの部分だけではない。

日本の古代にはどんな絃楽器があったのか？ その問いに明確な答えを出すのは難しい。どのように絃が張られ、どんなふうに弾かれていたのか。それがわからなければ、縄文遺跡からの（絃楽器かもしれない）出土物は、正体を失って「ヘラ状木製品」と呼ばれる。どのような人によって、どのように演奏されたのかという、楽器をとりまく“コト”の部分は、すなわち楽器の本質である。楽器の材質、形、大きさ、装飾など全てが、人間の側の考え、思い、好み、社会背景などという、見えない“コト”によって決められている。それなしに存在している楽器は一つもないだろう。

私たちは目に見える“モノ”の部分を重要視する傾向があるが、この世界を分類しているのは、どちらかと言えば“コト”のほうではないだろうか。ヘラ状木製品も、使われ方によって楽器になったり、農機具や何かの道具になったり、祭祀具になったりする。また、わらべ歌も全く同じ歌が、作業歌やお手玉歌や手遊び歌になる。

20 年間、この楽器博物館が試みてきたのは、楽器に、演奏という形で対峙し、その楽器の存在理由、存在意義を内側から探ることだったのではないか。そして「なぜ、それらの楽器が愛されたのか」「なぜ、変容を余儀なくされたのか」等々の問いかけが、私たち人間の姿を鏡のように映し出すことにも気づかせてくれた。私たちが失ってきたものも、私たちがこれから向かうであろう方向も、楽器たちは知っている気がする。

このような難しい展示を続けて来た楽器博物館というのは、希有な存在だろう。しかし、その重要性はすでに世界に知れ渡っているようだ。近年この博物館が受けてきた数々の賞が、それを物語っている。二十歳をむかえた浜松市楽器博物館にお祝いを申し上げるとともに、今後の展開をも期待したい。

てん・仁智（箏曲演奏・研究）

生きた楽器博物館

この楽器博物館の大きな特徴は「常に音が鳴っている」ということです。 通常の博物館の学芸員は展示物の「保守」を使命と考えがちですが、ここでは全く異なるマインドで運営されています。 楽器が所蔵されているだけではモノです。 楽器が楽器らしくあるのは、 それが鳴っているときです。 つまり、この博物館では常に楽器に「いのち」が与えられているのです。 そこに至るまでには館内で様々な議論や調査があったことでしょう。 楽器の幸せとは何なのか？ こういった指針が、 2014 年のストックホルム等で開催された世界博物館会議で、世界でも稀な「生きた楽器博物館」という評価につながってゆきました。また、 日本においても民族音楽学の世界的貢献に寄与した研究者・団体に授与される「小泉文夫音楽賞」を 2014 年度に受賞なさいました（5 月に授賞式）。 いよいよ一級の博物館のステージに登場してきたわけです。 この 20 年間の、展示以外の CD 制作、 ワークショップ・コンサート開催といった多彩なアウトリーチ活動の背後に、 館員の皆さんの弛まない努力があります。 市民の皆さんは、 こういうスタッフに恵まれていることを誇りに思っていただきたいと思います。 いやむしろ、 この博物館は浜松だけではなく日本の宝物であるということを、 いまいちど噛みしめるべきだと思っています。

中川真（大阪市立大学大学院教授〔アジア音楽研究・ガムラン演奏〕）

謝 辞

楽器博物館が無事 20 周年の年を迎えられましたことは、 楽器博物館にこれまでに関わられたすべての皆様のご支援のおかげであり、 見学に来て下さった全国、 世界の皆様のおかげであると、 深く感謝いたします。

私自身はオープンの 1 年前から準備に関わらせていただき、 以来今日まで仕事をさせていただきました。 日本で初めての楽器の博物館を世界に認めてもらうこと、 それは浜松が世界に認められることになるのですが、 それを目標にスタッフとともに一致団結して活動してまいりました。 20 年はあっという間に経ってしまいましたが、 芸術祭大賞や小泉文夫音楽賞など、 外部から評価をいただけたことで、 少しはその目標が達成できたのかなと感じています。

とは言え、 博物館はやっと成人になったばかりであり、 これからが本当の意味で真価を問われていくことになります。スタッフ一同精進してまいりますので、 どうぞ皆様の温かい応援をお願い申し上げます。

嶋和彦（浜松市楽器博物館館

楽器博物館 20 周年記念イベントに浜松市“福”市長「出世大名家康くん」登場 !!

楽器博物館 20 周年記念イベントを 4 月 11 日（土）、12 日（日）に開催しました。 両日ともに先着 100 名のお客様に楽器博物館オリジナルグッズをプレゼントし、 午後 2 時からは《シリーズ音楽の広場「アンクルンをひこう !」》という参加型ミニコンサートを行いました。 浜松市のゆるキャラで知られている、浜松市“福”市長「出世大名家康くん」が登場し、 会場を盛り上げてくれました。

アンクルンはインドネシアの竹でできた楽器で、 左右に振るとコロコロとした可愛らしい音が鳴ります。 竹のハンドベルとも言われる楽器で一つの楽器では一つの音程しか出せません。 お客様に一つずつ配り「きらきら星」「ふるさと」などを演奏しました。 家康くんが楽器博物館満 20 歳のプレゼントとして「ハッピーバースデー」の楽譜を持って登場すると、 会場からは大きな歓声があがりました。 ハッピーバースデーをまずはアンクルンだけで練習し、 最後に家康くんの指揮で歌を歌いながら演奏しました。 ミニコンサート終了後には写真撮影を行い、 多くのお客様に楽しんでいただきました。

家康くんは徳川家康の生まれ変わりだそうです。 徳川家康は浜松城を築き、 17 年間城主を務めたのち、 天下統一を成し遂げました。 ちょんまげには浜名湖のうなぎがついていて、 このうなぎを触ると出世すると言われています。家康くんの出世運にあやかって、 楽器博物館も今後ますます発展していきたいです。

シリーズ音楽の広場「アンクルンをひこう !」
日　時：平成 27 年 4 月 11 日（土）、12（土）　14:00
会　場：楽器博物館 天空ホール
出　演：当館職員　ゲスト：浜松市“福”市長「出世大名家康くん」
入場者：100 人

日本の魅力再発見!!　日本の雅楽 その④ ～正倉院の楽器～

前回までにもご紹介しましたが、雅楽の音楽とその楽器はアジアにルーツを持っています。奈良時代に日本に伝わった大陸のさまざまな音楽。それが平安時代に 100 年以上かけて統合･整理され、現在とほぼ同じ形の雅楽になりました。では、そのルーツである、当時の大陸の音楽とはどのような音楽だったのでしょうか。それを知る鍵となるのが、奈良の東大寺にある正倉院です。

正倉院には、大仏を建立した聖武天皇の遺愛品のほか、大仏開眼法会で使われた品など、奈良時代の宝物が約 9,000 点納められています。現代に残っている古代のものの多くは地中からの発掘品であり、正倉院宝物のように倉に納められて千年以上にわたって伝わった例は世界でもほとんどありません。発掘品ではないため当時の姿をとどめるものが多く、「天平のタイムカプセル」と例えられます。また、日本で作られたものだけでなく、遣唐使が唐から日本へ持ち帰ったものもあり、その素材や形、絵柄などからペルシャ、インド、唐とのシルクロードを通じた交易や文化交流をうかがい知ることができます。正倉院は「シルクロードの東の終着点」ともいわれます。

そのような正倉院の宝物に、楽器が多数あるのをご存知でしょうか。その数 23 種類 100 点以上。この中には雅楽が完成された平安時代に使用楽器からはずされ廃れてしまった楽器もありますし、現在の雅楽でも使われている楽器もみられます。また、楽器自体に楽器を演奏している絵が描かれているものや、演奏する姿が描かれている楽器以外の宝物が存在するのも面白いところです。これらは当時の人々がどのように演奏していたのかを知る手がかりになります。正倉院宝物の楽器と同じ楽器を演奏する絵は、中国の敦煌･莫高窟（とんこう･ばっこうくつ）など、かつてのシルクロード都市に残る壁画にも描かれています。

当館の開館 20 周年記念レクチャーコンサートのテーマの一つは「日本、アジア、そして世界」です。5 月 24 日は「甦る唐代琵琶譜の音楽～古代シルクロード･敦煌から正倉院へ～」。敦煌･莫高窟で発見された琵琶譜や、世界最古の琵琶譜である正倉院の琵琶譜を解読した研究者スティーヴン･G･ネルソン氏が解説し、当時使われていた楽器の復元品と、現在の雅楽器を用いた再現演奏を行ないます。復元楽器は古代西アジアで生まれたハープである「箜篌（くご）」、そして世界で唯一正倉院にのみ現存する、インド起源の五絃琵琶などを演奏予定です。現在使われる琵琶はペルシャに起源を持ち、四絃で糸倉（糸巻きの部分）がほぼ直角に後ろへ曲がっていますが、五弦琵琶は糸倉が曲がらず真っ直ぐに伸び、胴は四絃の琵琶より細長い形をしています。復元楽器でどのような音色が奏でられるのでしょうか。日本の雅楽の祖先でもある、古代シルクロードの音色が甦ります。

復元楽器 五絃琵琶（左）、箜篌（右）

■正倉院の楽器（主要なもの）
絃楽器…和琴（わごん）、琴、瑟（しつ）、箏、新羅琴（しらぎごと）、七絃楽器、箜篌（くご）、阮咸（げんかん）、琵琶、五絃琵琶
管楽器…尺八、横笛、排簫（はいしょう）、笙、竽（う）
打楽器…腰鼓（ようこ）、細腰鼓（さいようこ）、方響（ほうきょう）

これからの催し物

●展示室ガイドツアー 毎日曜日 展示品の解説
※催し物により変更もあります
●ギャラリートーク 毎日数回 展示品の解説を行います
●特別展 20 周年記念
「リードオルガンがくれた幸せ～近代日本の洋楽と学校教育と浜松～」
5/2（土）～ 6/14（日）
●日本リードオルガン協会 20 周年記念･浜松大会
「足踏みオルガン昨日･今日、そして明日へ」
公開講座「山葉オルガン創業の頃」
6/13（土）10:00 研修交流センター 講師：武石みどり
公開演奏会「リードオルガン･浜松からのメッセージ」
6/13（土）13:30 音楽工房ホール
出演：上畑正和、伊藤園子、中村証二、鈴木開、エヴァルト･ヘンゼラー、大津磨由美、鈴木重子、名倉亜矢子

浜松市楽器博物館だより
平成 27 年 4 月 13 日発行　No. 100
編集　浜松市楽器博物館
〒430-7790　浜松市中区中央 3－9－1
TEL 053-451-1128　FAX 053-451-1129
URL http://www.gakkihaku.jp/

●レクチャーコンサート
<フォルテピアノとその時代 第 2 回>
「ノクターンの誘惑～フィールドとショパン～」
4/22（水）19:00 天空ホール 出演：羽賀美歩
「可愛いナンシー：18 世紀のギター音楽」
5/15（金）19:00 天空ホール 出演：竹内太郎、市瀬陽子
「甦る唐代琵琶譜の音楽～古代シルクロード･敦煌から正倉院へ～」
5/24（日）15:00 音楽工房ホール
出演：スティーヴン･G･ネルソン、伶楽舎
<フォルテピアノとその時代 第 3 回>
「奏でる喜びをともに～エラールピアノと人生の煌めき～」
5/27（水）19:00 天空ホール 出演：荒川智美、山澤慧
<フォルテピアノとその時代 第 4 回>
「情熱と翳りのフォルテピアノ～イタリア･スペインの遺産から～」
6/10（水）19:00 天空ホール 出演：川口成彦
●ワークショップ
「気分はメヌエット～バロックとルネサンスのダンス入門」
5/16（土）18:30 天空ホール 講師：市瀬陽子、竹内太郎
●シリーズ音楽の広場 14:00&15:30（天空ホール）
4/29（水）「スチールパン」出演：松井奈都子、巻田剛志、牧原亮介
●ミュージアムサロン 14:00&15:30（天空ホール）
5/3（日）「薩摩琵琶」出演：琵琶デュオ（水島結子、後藤幸浩）
5/4（月）「電子楽器“オンド･マルトノ”」
出演：坪内浩文、市橋あゆみ
5/5（火）「電子楽器“テルミン＆マトリョミン”」
出演：竹内正美、"Mable"&"Da"